源氏物語葵巻御禊の日の大将供奉

丸山　薫代

一、問題の所在

源氏物語葵巻の巻頭近くには、賀茂祭の御禊の日と祭当日が描かれる。御禊の日の場面は車争いが後の生霊事件を導くものとして、祭当日の場面は後の光源氏と紫の上との結婚を予告するものとして、それぞれ物語上に役割を果たしており、そうした点については丁寧な研究が積み重ねられている。しかしながら、斎院御禊に光源氏が供奉したと描かれることの意味は、十分に明らかにされていないのではないか。

御禊の日の行列について、葵巻には次のようにある。

御禊の日、上達部など数定まりて仕うまつりたまふわざなれど、おぼえことに容貌あるかぎり、下襲の色、表袴の紋、馬、鞍までみなととのへたり。とりわきたる宣旨にて、大将の君も仕うまつりたまふ。

（葵②二〇～二一頁）[1]

これによれば、この時の斎院御禊には、規定に従って、複数人の上達部が供奉したという。「大将の君」つまり光源氏は、その規定の人数のうちの一人と解釈されている。

この御禊の日における光源氏は、行列に参加する者の中で最も注目を集める存在として描かれている。葵上の女房たちは「おほよそ人だに、今日の物見には、大将殿をこそは、あやしき山がつさへ見たてまつらんとすなれ」（葵②二一頁）と言い、行列における光源氏の様子は、「世にもてかしづかれたまへるさま、木草もなびかぬはあるまじげなり」（同二五頁）と、異常とも言えるほどの誉めぶりで語ら

れる。鈴木日出男氏は、「衆目の視線を集めるのが、まずは光源氏の存在となっている」「源氏の無類の麗姿こそが見ものであった[2]」と述べる。このように光源氏を「見もの」とする御禊の日だからこそ、六条御息所の人目を忍んでの見物と、普段はほとんど外出しない葵の上の見物とが、説得力を持つ。

大将兼参議、ないし大将兼中納言である光源氏が新斎院のいわゆる二度禊に供奉するのが、歴史上の現実の規定と照らし合わせておかしくないことは、第二節で確認するようにすでに説かれている。しかしながら、葵巻に描かれる光源氏の華やかな姿は、そうした規定だけで説明できるものであろうか。

本稿第二節では、新斎院の御禊をめぐる『延喜式』の記述等を見た上で、史実と照らして、葵巻の光源氏の供奉が、史実に背くものではないものの、新斎院の御禊の史実からだけではその華やかさが十分に説明できないことを見る。第四節では、例年の御禊に目を転じるが、例年の御禊で語られるのは衛門府、兵衛府の佐、尉といった身分の低い人々の晴れ姿であることを確認する。そこで第五節では、祭当日に目を転じ、「祭の使」と呼ばれる近衛府使を見、葵巻御禊の日における光源氏の姿が、「祭の使」のイメージに近いことを述べる。最後に、第六節において、このような光源氏の描写の意味を考察する。

二、紫野院入り前の御禊における上達部供奉

葵巻では、「そのころ、斎院もおりゐたまひて、后腹の女三の宮ゐたまひぬ」（葵②二〇頁）と、斎院の交替が語られる。歴史上、新しく卜定された斎院は、卜定の同年または翌年に御禊を行って初斎院入りし、卜定の翌々年には、三年の斎が済んだとして、四月に御禊を行って紫野院入り、賀茂祭への参加を果たす。その後は、毎年四月に御禊と祭への参加を行うことになる。つまり、斎院に関わる御禊には、初斎院入り前の御禊、卜定三年目四月の紫野院入り前の御禊、例年四月の御禊の三種類がある。

『花鳥余情』は葵巻の御禊の日について、供奉の上達部の人数等を根拠に、新斎院の卜定三年目の、紫野院入り前の御禊であると結論づけた。

いま此巻にいへるは野宮へ入給はんとての二度の御はらへをいへりその故は初度の禊には勅使参議一人供奉す二度禊には大納言中納言参議以下あまた供奉す毎年の禊には公卿一かうに供奉せす此巻云御禊の日かんたちめかすさたまりたる事なれとかたちあるをえらせ給

ふ延喜式に二度の禊の勅使には大納言中納言各一人参議二人四位五位各四人すへて十二人の勅使なりこれをかすさたまるといへり源氏の大将は参議二人の中なるへしこれをもてこれをいふに此巻にいへるは二度の禊うたかひなき物也[3]

葵巻の御禊では「上達部など数定まりて仕うまつりたまふわざなれど」（葵②二〇頁）と、複数の上達部の供奉が描かれている。初斎院入り前の御禊（「初度の禊」）は上達部は勅使参議一人のみ、例年の禊では公卿の供奉はないから、葵巻の御禊は紫野院入り前のもの（「二度の禊」）だというわけである。

こうした『花鳥余情』の見方は妥当であろう。例年の御禊でないのは当然として、上達部の供奉の人数のみならず、「祭のほど」（葵②二〇頁）と、賀茂祭の文脈の中で「御禊の日」（同頁）が描かれることからも、初斎院入り前の御禊とは考えられない[4]。初斎院入りの季節はいつと決まっていず[5]、それに対し紫野院入り前の御禊は、例年の賀茂祭の御禊の日の拡大版として行われるものだからである。

しかしながら問題は、葵巻の御禊を卜定三年目の紫野院入り前の御禊として読むことを前提とした上で、その上達部供奉の規定や史実のみによって、葵巻の御禊の日の光源氏の描写が説明できるか、という点にある。葵巻の御禊の日の光源氏は、見物する人々にとって一番の見るべき対象として華やかに描かれていた。こうした光源氏の晴れ姿は、御禊の上達部供奉だけで説明できるものであろうか。

『延喜式』巻六「斎院司」の、紫野院入り前の御禊の規定は次のごとくである。

凡斎王於初斎院三年斎。畢其年四月始将参神社。先擇吉日。臨流祓禊。〔供神料同初度禊。〕其儀。斎王乗輿。（…中略…）勅使大納言。中納言各一人。参議二人。四位。五位各四人。内侍一人。弁一人。外記。史各一人。太政官史生一人。弁官史生二人。官掌一人。神祇。内蔵。縫殿。陰陽。大蔵。宮内。大膳。木工。大炊。主殿。掃部。造酒。主水。左右馬等官省職寮司供奉。禊事既畢賜饌并禄。〔勅使已下五位已上内蔵寮饗之。六位已下大膳職。〕訖即廻帰。便留野宮更賜禄[6]。

斎王に供奉する行列の中に、「勅使大納言。中納言各一人。参議二人」が見える。

また、『西宮記』臨時五「初斎院二度禊」には、次のようにある。

入紫野院〔四月禊日入、〕任院司事、
中納言二人、参議二人、〔唐鞍、或倭鞍着杏葉也、〕四

位四人、左右少将、左右衛門佐各一人、〔已上倭鞍唐尾〕、馬寮助允、所衆六人如例、院司供奉[7]、

こちらでは「中納言二人、参議二人」となっていて、多少の違いが見られるものの、納言、参議が四人供奉するという点では同じである。

新斎院の紫野院入り前の御禊は、史料では簡単な記載しかない場合が多い。以下、多少なりとも上達部供奉の様子がわかるものを挙げていく。

A　十二日丙辰。賀茂斎内親王臨鴨水修禊。是日。便入紫野斎院。勅大納言正三位兼行右近衛大将源朝臣定監禊事。

（『日本三代実録』清和・貞観三年四月[8]）

貞観元年（八五九）十月五日に卜定された儀子内親王のもの。「監禊事」を勅使としての供奉と捉えてよいかは疑問が残るが、大納言兼大将の源定が御禊に関わっている。

B　十一日甲午。賀茂斎内親王臨於鴨水解禊。即便入紫野院。公卿及所司供事如常式。三年斎之後。去年可入野宮。縁穢而停。非緩也。

（『日本三代実録』陽成・元慶四年四月、「事」は国史大系頭注に「奉」を類聚国史により改めたとある）

元慶元年（八七七）二月十七日に卜定された敦子内親王のもの。紫野院入りは通常、卜定を第一年としたときの第三年に行われるが、ここでは第四年であり、その事情が説明されている。「公卿及所司」の供奉が読み取れる。

C　延喜五年四月十日、左大臣令奏陰陽寮勘申斎院御禊日云々、定十八日、十七日中納言藤原朝臣令奏斎院御前参議有障、不可奉仕、令勘先例、元慶無公卿御前、寛平納言一人、参議二人、或不如本数、令仰云、前例或有不満数、雖不足何事之有也、

（『西宮記』臨時五「初斎院二度禊」裏書）

延喜三年（九〇三）二月十九日に卜定された恭子内親王のもの。四月十八日の御禊の前日になって、「斎院御前参議」が供奉できなくなり、先例を調べさせたところ、御前の公卿は規定の人数に満たなくてもよいとわかった、とある。勅使としての供奉を「御前」と表現している。

D　十四日、…初斎院御禊、御前公卿大夫用否（否サ）葉鞦、但長官加用昌蒲形尾袋、自余如尋常祭儀、

（『貞信公記抄』延長二年（九二四）四月[9]）

延喜二十一年（九二一）二月二十五日に卜定された韶子内親王のもの[10]。『西宮記』にも引用される。ここでは「御前公卿大夫」の鞍の装束が確認できる。

E　十六日丙午。賀茂斎院選子内親王従大膳職禊東河。入紫野院。今日。凶会日也。中納言為光為前駆。

（『日本紀略』貞元二年（九七七）四月）

天延三年（九七五）六月二十五日に卜定された選子内親王のもの。中納言為光が「前駆」を務めている。この「前駆」も、「勅使」としての供奉を言うのであろう。

このように、紫野院入りのための御禊における公卿の供奉は確認できる。しかしこれらの記述は簡単で、彼らが葵巻の光源氏のように、御禊の行列の「見もの」として華やかに見られていたかどうか、わからない。

もちろん、選子内親王の長い斎院任期により『小右記』や『御堂関白記』に新斎院の記事が残らないため、実際のイメージをつかむことは難しい。だが、近衛大将として世に重んじられる光源氏の晴れ姿を描くにあたり、兼官である参議もしくは中納言としての役目を描くのが適当であるかは疑問である。右のAの例を、『花鳥余情』は「斎院御禊大将供奉の例なり」として引いている。確かに、Aの例で、大納言兼大将の源定は新斎院の御禊に関与している。だが、彼は翌々年の貞観五年正月三日に五十九歳で亡くなっており、葵巻の光源氏とはほど遠い。光源氏の場合、参議ないし中納言という太政官での官職よりも、近衛大将という官職の方が上であることを考えれば、太政官での官職に規定される仕事は、大将という華やかさを描くのに必ずしも適していない。

私はここで、光源氏の供奉が規定を越えたものだと言いたいわけではない。「とりわきたる宣旨にて、大将の君も仕うまつりたまふ」（葵②二一頁）からは、規定の人数の公卿の他に光源氏が供奉したと読む可能性も排除できないが、規定内の供奉として、光源氏が特別に指名されたと読む方が普通であろう。しかしながら、若い大将の晴れ舞台という物語の中でのイメージは、新斎院の紫野院入り前の御禊の日の上達部供奉ではない、もっと別のものに想像力のもとがあるのではないかと考えたいのである。

三、初度禊の場合

前節では、葵巻の御禊が斎院卜定三年目の紫野院入り前の御禊であることを述べた上で、御禊の日の光源氏は『延喜式』に規定される公卿の勅使の一人と読まれるけれども、史実における供奉の公卿のイメージでは、光源氏の晴れ姿を説明しきれないことを述べた。

そこで本節では、卜定の年または翌年に行われる、「宮城内」の初斎院に入る際の御禊について、簡単に見ておく。

『延喜式』巻六「斎院司」に「凡定斎王畢。即卜宮城内便所。為初斎院。即先臨川頭。祓潔乃入。」とあり、その

日の儀式が次のように規定されている。

至于期日。斎王駕車赴向。走孺十人。（…中略…）勅使参議一人。院別当一人。五位四人。六位四人並前駆。左右近衛。左右兵衛各二人。左右門部各二人。左右火長各十人供奉。左右京職官人率兵士已上迎候。山城国司率郡司候京極路。弁一人。史一人。史生二人。官掌一人。率供奉諸司。就禊所行事。斎王到幕臨流而禊。神祇官中臣進麻。宮主読祓詞。訖即賜勅使已下饌并禄。〔弁官録見参。付院別当。〕「即」既而廻帰入初斎院。即卜定供奉井立賢木。

また、『西宮記』臨時五「初斎院二度禊」には、次のようにある。

初入諸司、〔定行事上卿弁左右衛門陣権宮、〕供奉参議一人、左右衛門、左右兵衛佐尉各一人、馬助允次使、所御前六人、本宮別当四位一人、騎馬在車前、典侍等供奉、向東河解除入諸司、

『花鳥余情』も述べていたように、やはり公卿の供奉は参議一人のみである。

この初斎院入り前の御禊の勅使参議は、どのようであったか。詳しい記述のある史料はほとんどない。

二日庚戌。定初斎宮初斎院御禊御前次第使等。（…中略…）二十七日乙亥。賀茂斎内親王御禊。入左近衛府。

（『日本紀略』安和元年（九六八）十二月）

右は、康保五年＝安和元年七月一日に卜定された尊子内親王の初度禊の記述であるが、源氏物語以前の史料で初度禊の供奉の様子が窺えるものは、この程度である。

そもそも、例年の御禊の行列は人々が見物するものであり、紫野院入り前の御禊の行列も見物されていたと思われるが、初度禊は、見物すべきものであったのか微妙である。[11] 少なくとも、紫野院入り前の御禊に比べて地味な初度禊のイメージが、葵巻御禊の日の描写に寄与したとは考えにくい。

四、例年の御禊の前駆

第二節でも触れたように、新斎院の紫野院入りのための御禊は、例年の賀茂祭の御禊の日の拡大版としてある。こうした性格に鑑みれば、例年の御禊も、葵巻の御禊の日の行列を理解する上での助けになるであろう。そこで、本節では、例年の賀茂祭の御禊について確認する。

『花鳥余情』が「毎年の禊には公卿一かうに供奉せず」と言っていたように、例年の賀茂祭の御禊では、公卿が行列に加わることはない。代わりに例年の御禊の日の行列で

目立つのは、衛門府、兵衛府の佐、尉による「前駆」と、馬寮の助、允による「次第使」である。

『北山抄』、『西宮記』、『江家次第』には、これらの前駆、次第使を定める「前駆定」のことが記載されている。『北山抄』巻一「中申日賀茂祭事」は次のように記す。

前十許日差禊日〔午日修禊、有未日例、〕前駆次第使等、〔参議書之、不差自志転尉之者、〔至佐不然、〕一上若有障、以次人差奏、〔加奏一上有障之由、〕令蔵人奏之、返給、給外記、

祭の日の十日前頃に、御禊の日および「前駆次第使等」を定める。「佐」、「尉」、「志」は兵衛府、衛門府の二、三、四等官である。志から尉に転じた者は指名しないが、志から佐へ転じた者は除外しない事など述べられており、要するに、兵衛府、衛門府の佐、尉が前駆の対象者である。『江家次第』巻六の「御禊前駆定」項では寛仁三年四月十日のものを書式の例として載せるが、そこには、「賀茂斎内親王禊日前駆」として左衛門佐、右衛門権佐、左兵衛佐、右兵衛佐、左衛門権大尉、右衛門権少尉、左兵衛権少尉、右兵衛権少尉の名が、「次第使」として右馬権助、左馬権少允の名がある。衛門府、兵衛府の佐、尉の中から前駆が、馬寮の助、允の中から次第使が定められることがわかる。

『御堂関白記』や『小右記』の御禊の日の記事では、前駆、次第使がしばしば言及される。『御堂関白記』を見てみよう。

A　十七日、庚午、（…中略…）申家馬者左衛門佐（源）兼貞・右衛門佐（藤原）孝忠・左衛門尉（源）頼信・右衛門尉（×督）守親・左兵衛佐（藤原）朝任、所御前、木工允（橘）俊孝・平明範等也、為見物、（寛弘元年四月）

B　十一日、壬午、御禊如常、出立右兵（頼宗）・左兵衛佐（顕信）等、見物、（寛弘三年四月）

C　十七日、癸未、御禊見物、右兵衛佐道雅着織物袍如赤色、衆人頗奇、前駆右衛門佐代内匠頭藤原理邦、次第使本者申障代右馬助孝義、右衛門佐依四位、本人不奉仕、（寛弘四年四月）

D　十六日、丙午、見禊、上達部多被来、顕信・能信等奉仕前駆、（寛弘五年四月）

これらにおいて道長は、自分に近しい人間が前駆として御禊に奉仕することを記したり、前駆の人の衣装がおかしいことを記したりしている。

『大鏡』には、若き日の頼通が御禊の前駆として供奉する様子が語られている。

今の関白殿（＝頼通）、兵衛佐にて、御禊に御前せさせたまへりしに、いと幼くおはしませば、例は本院に帰

らせたまひて、人々に禄などたまはするを、これは河原より出でさせたまひしかば、思ひかけぬ御ことにて、さる御心まうけもなかりければ、御前に召しありて、御対面などせさせたまひて、（選子ガ）奉りたまへりける小袿をぞ、かづけたてまつらせたまへりける。

（『大鏡』師輔伝、一五九頁）

右は、頼通が兵衛佐の時、御禊の前駆として供奉したが、幼い故、紫野院へ還る所まで供奉せず賀茂川で別れて帰ったために、選子が機転をきかせ、着ていた小袿をその場で禄として与えた、というものである。選子を称える文脈の中ではあるが、「今の関白殿」の若かりし日の姿として、御禊の前駆が語られている。[12]

こうした御禊の前駆は、例年の御禊の日の行列の花形というべきものであろう。しかし、それは下級官人のための花形でしかない。もし身分の高い人物の事跡として語ろうとすれば、この『大鏡』の頼通のように、ごく幼い年齢でのこととして語られなければならなくなってしまう。こうした御禊の前駆のイメージは、葵巻の光源氏の姿には直接つながらない。

五、「祭の使」のイメージ

第二節で、新斎院が紫野院に入る際の御禊について、行列への公卿の参加は儀式書や史料から確認できるものの、それらの公卿が行列の「見もの」であるというようなイメージは、残された史料からは見出しがたいことを確認した。前節では、例年の御禊の日について、行列に供奉するのは兵衛佐などの下級官人が務める前駆であるため、葵巻の御禊の日の光源氏の姿にはつながらないことを見た。

それでは、葵巻の御禊の日の光源氏のイメージは、何に由来するものなのであろうか。ここで、御禊からさらに目を移して、例年の賀茂祭当日について考えてみたい。

賀茂祭当日の行列の花形が、「祭の使」と呼ばれる近衛府の使であることは、よく知られている。近衛中少将が担当する、華やかな役職である。[13]『延喜式』巻六「斎院司」には「凡斎王毎年四月中酉日。参上下両社祭」とあり、その一行は次のように記される。

勅使内蔵寮五位已上官一人。近衛府。馬寮五位已上官各一人。〔並左右更供。〕走馬十二騎。〔左右近衛更供。〕中宮。東宮使五位已上官各一人。内侍并命婦蔵人。闈司各一人。中宮命婦。蔵人各一人。自余准初度四月禊

儀。但加腰輿一具。駕輿丁四人。〔事見儀式。〕

これについて丸山裕美子氏は、「賀茂祭の祭使は、延喜式の規定では、内蔵寮・馬寮・近衛府のそれぞれ五位以上の官人、中宮・東宮使、女使である」とした上で、「祭使の中でも平安中期以降近衛府使が特に目立った存在であったことは周知の事実である」とする。[14] 三橋正氏によれば、春日祭・賀茂祭において、本来は内蔵寮の幣を奉る内蔵寮使が祭使の中心だったが、摂関期には、内蔵寮使や馬寮使よりも、近衛府使が祭使の中心と考えられるようになり、単に「祭使」というと近衛府使を指すようになったという。[15]

『小野宮年中行事』[16] には「仁和四年六月二日御記云々。右近衛中将時平其児也。被充賀茂祭使。饗近衛等之日。彼大臣手親執盃与近衛等。是一失也。」とある。『貞信公記抄』延長二年四月十七日条には、「少将（藤原実頼）祭饗、於東五条行之」とあり、翌日の還饗には、「使少将已下」に酒を飲ませたとある。『小右記』永祚元年四月二十三日条には、早朝に実資が太政大臣頼忠邸に行き、頼忠の子・公任の祭使としての出立に立ち会った様子が記される。正暦四年四月十五日条では、実資は「摂政殿」つまり藤原道隆邸に「摺袴」を送った後、「午時」に自身赴き、大納言藤原朝光ら多くの公卿と会って酒を飲んでいるが、これは道隆の子である右中将隆家が祭使を務めているためである。『御堂関白記』寛弘元年四月二十日条では、近衛府使のもとに舞人下襲を、典侍のもとに車と牛を送っている。寛弘二年四月二十日条では、枇杷殿の西の対から「使雅通」を出立させている。寛弘三年四月十四日条は「土御門従東対出立、忠経」とある。寛弘四年四月十九日条には、「近衛使頼宗従東対立」とあり、寛弘七年四月二十四日条には、教通が近衛府使を務めたことが記される。このように、出立儀を中心に、古記録には近衛府使に関わる記事が多く見られる。

文学作品における賀茂祭当日の描写を見てみよう。

A　かくて、殿（＝源正頼邸）より、祭の使出で立ち給ふ。近衛府の使には中将の君（＝正頼三男祐澄）、内蔵寮の使には内蔵頭かけたる行正、馬寮のには式部卿の宮の右馬の君と出で立ち給ふ。

（『うつほ物語』「祭の使」二〇三頁）[17]

B　近衛府の使は、頭中将（＝柏木）なりけり。かの大殿にて、出で立つ所よりぞ人々は参りたまうける。藤典侍も使なりけり。おぼえことにて、内裏、春宮よりはじめたてまつりて、六条院などよりも、御とぶらひどもところせきまで、御心寄せいとめでたし。宰相中将（＝夕霧）、出立の所にさへとぶらひたまへり。

（藤裏葉③四四七頁）

C　春日の使の少将（＝頼通）は中将になりたまひて、今年の祭の使せさせたまふ。殿は、一条の御桟敷の屋長々と造らせたまひて、檜皮葺、高欄などいみじうをかしうせさせたまひて、この年ごろ御禊よりはじめ、祭を殿も上も渡らせたまひて御覧ずるに、今年は使の君の御事を、世の中揺りていそがせたまふ。その日になりぬれば、みな御桟敷に渡らせたまひぬ。殿は使の君の御出立の事御覧じ果ててぞ、御桟敷へはおはします。（…中略…）さしもあらぬだに、この使に出で立ちたまふ君達は、これをいみじきことに親たちはいそぎたまふわざなれば、まいてよろづことわりに見えさせたまふ。

（『栄花物語』巻八はつはな・寛弘二年①三七〇～三七一頁）

D　祭の日の事も、例の事なり。近衛司の使は、太政大臣の御孫の少将ぞかし。権大納言の御子よ。いと若ううつくしきさまにて、…（『狭衣物語』巻三②一五三頁）

Aは近衛府使、内蔵寮使、馬寮使の三人を描くが、近衛府使を務める中将・祐澄、すなわち源正頼の息子であて宮の兄が話題の中心となろう。Bは頭中将である柏木が近衛府の使を、夕霧の恋人・藤典侍が内侍所の使を務める場面である。柏木は藤原氏の大臣の息子として、将来を嘱望されている。Cは、藤原頼通が賀茂祭の使を務めるため、道長らがその準備に邁進する様子であるが、史実ではないことが指摘されている。Dは源氏の宮が斎院として初めて参加する祭の場面で、この「少将」は洞院の上の父太政大臣の孫、狭衣と一品宮との噂を流した権大納言の息子であり、この場面限りの人物である。

Cが道長の息子の晴れ舞台として大きく描かれるのに対し、A、B、Dで近衛府使が語られることには物語的な必然性は薄い。けれども、物語的な必然性がなくとも賀茂祭の場面において近衛府使について言及があるということは、賀茂祭といえば近衛府の使、という認識の強さを示していよう。

こうした、源氏物語の他の巻も含めた文学作品における賀茂祭の描写とは異なり、葵巻の祭当日の場面には祭の使が登場しない。光源氏と紫の上との見物および源典侍とのやりとりが語られるのみで、見物の対象である行列自体は描かれない。もちろん『落窪物語』を見ても、また『小右記』などでも、見物の側だけが描かれて見物の対象が描かれないことはままある。けれども、葵巻では、祭当日の行列が描かれない代わりに御禊の日の行列が描かれているこ

とに注意したい。

ここから考えられるのは、葵巻の御禊の日の光源氏ら上達部供奉の描写が、賀茂祭当日の祭の使のイメージを借りたものなのではないか、ということである。光源氏は近衛大将であり、祭の使を近衛中少将が務めることが連想される。通常描かれる祭の使の姿を、御禊の日の勅使の上達部という形に作り替えたために、敢えて祭当日には祭の使の描写を避けたのではないだろうか。

六、新斎院御禊の大将供奉の一回性

ここまで、葵巻の御禊の日の行列への光源氏の供奉が、上達部供奉の規定に基づくとはいえ、例年の祭の日における少中将の近衛府のイメージを借りているのではないかと考えた。そこで、最後に、そのような仕方で御禊の日の行列の光源氏が描かれることの意味を考えてみたい。

源氏物語以前に、新斎院の紫野院入り前の御禊の上達部供奉を、この葵巻の光源氏のように華やかに描いた例は見当たらない。源氏物語以後でも、斎院交替が詳しく語られる『狭衣物語』では、このような描写は見られない[18]。供奉の規定及び史実があるとはいえ、物語で新斎院御禊の上達部供奉を「見もの」として描くことは、源氏物語独自のものなのではないか。

そもそも、葵巻の斎院交替は、一般には桐壺帝から朱雀帝への代替わりに伴うものと理解されている。しかしすでに指摘されているように[19]、天皇の代替わりに伴って交替する斎宮とは異なり、『延喜式』の規定に反して、斎院の交替が天皇の代替わりと連動するのは、その代替わりが天皇の崩御による場合、つまり斎院にとって父などの喪となる場合にほとんど限られている。源氏物語中でも、朝顔斎院は朱雀帝から冷泉帝への代替わりに伴って退下することはない。この葵巻の斎院交替は、今回の代替わりと関係なくたまたまこのタイミングで生じたものだとも、天皇の譲位では斎院は交替しない実態を無視したものだとも考えられるが、いずれにせよ、崩御を伴わない桐壺帝から朱雀帝への代替わりではその必然性がないにも関わらず葵巻が斎院交替を描くのには、意図的なものを感じる。新斎宮である秋好との対比は大きな要素であるが、それだけではないだろう。新斎院の二度禊というまれな状況を作り出すことで、例年の賀茂祭の延長上にありながらも例年とは異なる華やかな舞台を、新しく大将となった光源氏に用意したのだと考えたい。

葵巻御禊の日の光源氏の晴れ姿は、紅葉賀、花宴の際の

光源氏の麗姿に連なる[20]一方で、朱雀帝の御代においては、桐壺院の影響力の大きい中での最初で最後の晴れ姿でもある。後に朱雀帝治世下で政治的没落を味わう光源氏が、ここでは朱雀帝の同母姉妹の斎院御禊に供奉し、朱雀帝治世の栄華を支えている。光源氏、弘徽殿大后、朱雀帝が対立せず朱雀帝御代を支え合っている今の状況は、やがて失われる不確かなものである。毎年登場し一定のイメージを持たれている祭の使ではなく、そのイメージを利用しつつ、二度禊の日の上達部供奉という語られることの少ないものの中に大将としての光源氏の姿を描くことの一回性は、ここでの光源氏の麗姿が希有な状況に支えられ、当面は華やかであるがはかなさを伴うものであることと連動しているのではないか[21]。

さらに、六条御息所の物語にとっても、光源氏の晴れ姿の描かれる場面が御禊の日であることには意味があった。光源氏の晴れ姿を見て物思いを深める六条御息所の心情は、「影をのみみたらし川のつれなきに身のうきほどぞいとど知らるる」（葵②二四頁）、「定めかねたまへる御心もや慰むと立ち出でたまへりし御禊河の荒かりし瀬に、いとどよろづいとうく思し入れたり」（葵②三一頁）などと、古今集歌「恋せじと御手洗川にせし禊神は受けずぞなりにけらしも」（古今、恋一、五〇一）やその歌を含む『伊勢物語』六五段（第五句「なりにけるかな」）を引用して語られていた。禊ぎによって恋を醒まそうとするが、かえって物思いを増す、という古今集引用、伊勢物語引用のために、車争いは御禊の日に起こる必要があった。御禊の日に女が男主人公を行列の中に眺めるためには、その御禊の日は例年ではなく新斎院の紫野院入り前のものとして設定されなければならなかっただろう。

このように、葵巻の御禊の日の光源氏は、新斎院の紫野院入り前の御禊への上達部供奉として、他の物語での御禊、祭への君達の供奉の描写とは異彩を放っていた。しかも上達部供奉は納言、参議の仕事であるが、近衛中少将が務める祭の使のイメージを利用することで、あたかも近衛大将としての資格で行列に加わっているかのごとき印象を与え、その華やかさを強めた。これは、朱雀朝下での最後の晴れ姿として、かつ、六条御息所の古今集引用、伊勢物語引用に基づく物思いを可能にするものとして、特に注意深く設定されたものであろう。二度禊への上達部供奉は規定があるために、そこで納得してしまいがちだが、他の物語や古記録の描写と見比べてみると、いかにこれが通常の描写とは異なる、葵巻の光源氏のために用意された一回的な

ものであったかが、明らかになるのである。

【注】

（1）『源氏物語』『栄花物語』『狭衣物語』『大鏡』の引用は、『新編日本古典文学全集』に拠り、巻名・巻数・頁数を示した。なお、私に句読点を改めた箇所がある。

（2）鈴木日出男「車争い前後――六条御息所と光源氏（一）」（同『源氏物語虚構論』東京大学出版会、二〇〇三。初出は一九八〇）

（3）伊井春樹編『源氏物語古注集成第1巻　松永本花鳥餘情』（桜楓社、一九七八）

（4）原田芳起氏「源氏物語年立論への疑い――葵の巻前後の部分構図について――」（『国語と国文学』一九六〇・五）は年立論の立場から、葵巻の御禊を初斎院入り前のもの（初度禊）と読むべきことを主張するが、無理があろう。今井上氏「『源氏物語』の死角――賀茂斎院考」（『国語国文』二〇一二・八）、浅尾広良氏「朱雀帝御代の始まり――葵巻前の空白の時間と五壇の御修法――」（『大阪大谷国文』二〇一四・三）は、紫野院入り前の御禊（二度禊）と読むべきことを述べている。

（5）儀子内親王は貞観元年十二月二十五日（三代実録）、穆子女王（内親王）は元慶六年七月二十四日（三代実録）、直子女王は寛平元年九月二十三日（日本紀略）、君子内親王は寛平五年六月十九日（日本紀略）、婉子内親王は承平二年九月二十五日（貞信公記抄）、尊子内親王は安和元年十二月二十七日（日本紀略）、選子内親王は貞元元年九月二十二日（日本紀略）。

（6）『延喜式』の引用は国史大系による。

（7）『西宮記』『北山抄』『江家次第』の引用は『改訂増補故実叢書』による。

（8）以下、六国史および『日本紀略』の引用は国史大系による。

（9）『貞信公記』『小右記』『御堂関白記』の引用は、東京大学史料編纂所編『大日本古記録』による。

（10）浅尾氏前掲論文は初度禊とするが、今井上「『源氏物語』賀茂斎院剳記――付・歴代賀茂斎院表」（『専修国文』二〇一五・一）は二度禊と読むべきことを論じる。

（11）『狭衣物語』巻二には、斎院となった源氏宮の初斎院入りとおぼしき場面が見られる（新全集は大弐邸への渡御とするが、所京子「『狭衣物語』にみる斎院の史的考察」同『斎王の歴史と文学』国書刊行会、二〇〇〇：初出は一九八一）は、初斎院渡御とする）が、「つとめてより上達部・君達よりはじめ、世にある人参り集まりて」（『狭衣物語』巻二①二八

二頁）と邸への人々の集合は語られるものの、行列を人々が眺めているような場面は見られない。

（12）この『大鏡』の記述は、必ずしも史実に即したものではないようである。保坂弘司『大鏡全評釈上巻』（學燈社、一九七九）は「頼通が兵衛佐に任ぜられたのはいつか、『公卿補任』にも記録がない」とし、河北騰『大鏡全注釈』（明治書院、二〇〇八）はさらに、「頼通は兵衛佐に任じた記録はない。長保年間であると、こじつけたか」とする。橘健二・加藤静子校注・訳『新編日本古典文学全集　大鏡』（小学館、一九九六）は、『小記目録』巻五「賀茂祭事」「長保五年（一〇〇三）四月十二日、頼通、自斎院、令給御衣事」を指摘する。

（13）大津透氏は、「近衛次将の公卿候補生としての華やかな活躍に勅使があり、とくに春日祭・賀茂祭などにおける走馬を供する近衛府使が注目される（これが一般に祭使と称される）」と述べる（大津透『道長と宮廷社会』講談社学術文庫、二〇〇九：原二〇〇一）。

（14）丸山裕美子「平安時代の国家と賀茂祭――斎院禊祭料と祭除目を中心に――」（『日本史研究』一九九〇・一一）

（15）三橋正「摂関期の春日祭――特に祭使と出立儀・還饗について――」（同『平安時代の信仰と宗教儀礼』続群書類従完成会、二〇〇〇：初出は一九八六）

（16）『群書類従』第六輯公事部

（17）『うつほ物語』の引用は室城秀之校注『うつほ物語　全　改訂版』（おうふう、二〇〇一）による。

（18）第五節で引用した『狭衣物語』の源氏宮の初めての賀茂祭参加場面の直前には、紫野院入りのための御禊が描かれており、その時狭衣は大将である。しかし狭衣は源氏の宮の出立を世話し、賀茂の河原での祓も見ているらしく読めるけれども、行列に供奉したと読めない。

（19）堀口悟「斎院交替制と平安朝後期文芸作品――『狭衣物語』を中心として――」（『古代文化』一九七九・一〇）

（20）篠原昭二「葵・賢木の巻の場合――光源氏の運命と行為――」（同『源氏物語の論理』東京大学出版会、一九九二：初出は一九七二）

（21）須磨巻の須磨下向を目前にした桐壺院の墓参の場面で、「かの御禊の日仮の御随身にて仕うまつりし右近将監の蔵人」（須磨②一八〇頁）によって葵巻の御禊が回想されていることも思い起こされる。